

〈日本史例会〉

東京国立博物館「国宝大徳寺聚光院の襖絵」鑑賞会 報告

日本史例会として、東京国立博物館特別展「国宝大徳寺聚光院の襖絵」鑑賞会を行いました。

多数のご参加ありがとうございました。

日時：11月23日(日) 午後1時30分～

◇今例会の趣旨

聚光院は戦国武将三好長慶の菩提を弔うため、養子の義継が永禄9年(1566)に大徳寺山内に創建した塔頭です。その方丈をかざる襖絵は、桃山時代を代表する画家狩野永徳とその父松栄によって描かれました。「国宝大徳寺聚光院の襖絵」では通常非公開となっている国宝の障壁画46面が建築状況にあわせた立体構成で一挙公開されます。

また聚光院は千利休の墓碑があり、表千家・裏千家・武者小路千家の菩提所としても知られていますが、展覧会では創建期の関係資料や、利休と聚光院との関係を伝える茶道具・資料もあわせて展示されます。これらの展示品を通して桃山美術を味わうとともに、聚光院が歴史と文化に果たした役割を感じて頂けると幸いです。

◇日本史例会参加報告

博士前期課程一年 儘田めぐみ

今年度の日本史の例会は、十一月二十三日に東京国立博物館における「国宝大徳寺聚光院の襖絵」鑑賞会ということで行われました。数名の卒業生の会員の方にも御参加頂きましたが、祝日であったということもあって館内が大変混雑しており、企画者の方が用意してくださったレジュメ等を参照しつつ各自自由に鑑賞することになりました。

大徳寺は京都市北区紫野大徳町に所在する臨済宗の名刹で大徳寺派の総本山であり、その聚光院は永禄九年(一五六六)に三好義継が亡父長慶の菩提を弔うために、笑嶺和尚を開山として建立されました。境内には三好長慶の墓、また千利休が笑嶺に帰依したことから利休をはじめとする千家歴代の墓があります。

今回出品された国宝の「聚光院方丈障壁画」は狩野松栄・永徳と、室町・安土桃山時代の狩野派を代表する絵師の作品です。私の周りには大勢の来館者がいるにもかかわらず、静寂で、部屋の中にたった一人で襖に囲まれているようで、絵の風景の中に入り込んでいるような錯覚を覚えました。これこそが本当に優れた絵画ではないかと私の中に新たにひとつ、良い絵を判断する基準ができた気がします。また、「花鳥図」に見られるように、松の樹が襖の中におさまらずに天井に向かって突き抜けるような力強さから戦国期という時代を感じることができたようにも思います。

そして、襖絵の鑑賞ということでしたが、聚光院と利休は関わりが深かったため、利休のゆかりの品々も出品されておりました。聚光院において、室町・安土桃山時代の最高峰の襖絵に囲まれて、最高峰のお茶を嗜むといった当時の極上の文化というものに少し也とも触れる事ができ、参加された皆様もきっと有意義な時間をお過ごしになられたかと思います。

最後に、企画された方々は襖絵の説明等、色々と準備をされていたかと思いますが、諸事情により急遽、自由見学となってしまい残念でしたが、本当にお疲れ様でした

[サブゼミのページに戻る](#)

[トップに戻る](#)